The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	古墳における副葬品配置の変化とその意味 ： 鏡と剣を中心にして
Author(s)	福永, 伸哉
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2000, 34, p. 1-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48079
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

古墳における副葬品配置の変化とその意味

── 鏡と剣を中心にして ──

福 永 伸 哉

1　はじめに

古墳の埋葬施設にみられるさまざまな副葬品は、その品目や数量が被葬者の生前の政治的、社会的ステイタスを反映するため、考古学的に重要な検討対象となる。同時に副葬品が埋葬施設に置かれる際の配置方式も、古墳で行われた葬送儀礼のスタイルをうかがう有効な手がかりとなる。

古墳時代初頭の最古型式の前方後円（方）墳において、副葬品目の種類や配置に列島の広い範囲で共通性がうかがえることは、すでに多くの研究者が注目するところである（寺沢1979、用田1980、今尾1984）。倭の中央政権の政治的枠組みに参画した首長層の間で、共通の葬送儀礼が創出されたことを示すものであろう。

この最新の葬送儀礼を採用し、実施しうることがまた、中央政権との政治的な結びつきの強さを表示することにもなったと考えられる。先行研究に学びながら別稿で述べたように、古墳時代前期においては、共同体の継続のために不可欠な首長の葬送儀礼の方式は畿内の有力古墳においてより複雑で手の込んだあり方を呈している（福永1999ａ）。このことは畿内に古墳を残した勢力が、新たな儀礼創出の主導権を握り、かつ必要な情報や器物の流れをコントロールすることによって、儀礼的な中心として地域勢力に対する優位を確立した状況を示唆している。社会のエネルギーの多く

が首長の葬送儀礼のために投入された古墳時代においては、ある意味でその儀礼を管理することが一つの政治戦略にもなりえたともいえよう。

では、その管理された葬送儀礼の方式に変化がみられる場合には、どのような原因を考えたらよいだろうか。もちろん何事でもスタイルが時とともに姿を変えていくのは世の常でもある。しかし、さまざまな要素にわたって変化が連動して起こっている場合には、単なる流行の推移とは違った大きな動きを嗅ぎ取ることも必要ではなかろうか。

このような問題関心を持って、本稿では、有力首長の葬送儀礼においてほぼ必須の副葬品目となった鏡と剣を取り上げ、その副葬配置のあり方と変化を検討することにより、初期大和政権が創出した儀礼方式の変質とその背景を探ってみたい。

2　銅鏡配置方式の成立と衰退

新しい配置方式　中国鏡の大量副葬が始まる前方後円墳成立期においては、銅鏡副葬配置の点で弥生時代には系譜のたどれない方式が現れる（表1）。その一つが、身体包囲型、すなわち被葬者の身体を囲むように多量の銅鏡を配置する方式である[1)]。かつて、筆者は三角縁神獣鏡の副葬配置について整理し、初期の古墳において銅鏡が多量副葬される場合にこの配置がとられたことを指摘した（福永1995）。京都府椿井大塚山古墳、奈良県大和天神山古墳、岡山県湯迫車塚古墳、鶴山丸山古墳、福岡県一貴山銚子塚古墳などで事例が認められていたが、1998年には古墳時代前期前半の奈良県黒塚古墳で、33枚の三角縁神獣鏡がこの配置方式で副葬されている未撹乱の好例が明らかとなり、身体包囲型配置の位置づけを考える大きな手がかりを提供した（橿考研1999）。

鏡の身体包囲型配置は、古墳時代前期の限られた時期にとくに有力な古墳にのみみられる方式であり、初期大和政権の整備創出した葬送儀礼の中

表１　身体包囲型・頭足分離型配置の鏡副葬を行う古墳

古墳名	時期	鏡形・規模m	副葬配置	枚数	鏡の種類 頭部の鏡種	足部の鏡種
岡山・湯迫車塚	Ⅰ期	方方・48	身体包囲	13	三角縁11、画文帯神獣、内行花文	
京都・椿井大塚山	Ⅰ期	方円・170	〃	*36	三角縁32、画文帯神獣、内行花文２、方格規矩	
奈良・黒塚	Ⅰ期	方円・120	〃	34	三角縁33、画文帯神獣	
愛媛・朝日谷２号	Ⅱ期	方円・30	〃	2	斜縁二禽二獣	斜縁二神二獣
兵庫・城の山	Ⅱ期	円・36	〃	6	斜縁四獣、方格規矩、重圏文	三角縁３
滋賀・雪野山	Ⅱ期	方円・70	頭足分離	5	三角縁、内行花文、ダ龍	三角縁２
岡山・鶴山丸山	Ⅲ期	円・60	〃	*34	三角縁２、内行花文６、方格規矩６、盤龍２ほか	
福岡・一貴山銚子塚	Ⅲ期	方円・103	〃	10	三角縁８、内行花文、方格規矩	
大阪・茶臼塚	Ⅲ期	方・22	〃	2	四獣	三角縁
大阪・紫金山	Ⅲ期	方円・100	〃	12	三角縁２、方格規矩、勾玉文	三角縁５
大阪・弁天山Ｃ１号(後円部石室)	Ⅲ期	方円・73	〃	3	斜縁二神二獣、四獣	三角縁
京都・寺戸大塚（前方部）	Ⅲ期	方円・98	〃	3	獣帯	三角縁、方格規矩
京都・長法寺南原	Ⅲ期	方方・60	〃	6	盤龍	三角縁４、内行花文
京都・妙見山（前方部）	Ⅲ期	方円・120	〃	*1	盗掘のため不明	三角縁
京都・園部垣内	Ⅲ期	方円・84	〃	6	三角縁、盤龍、獣帯	三角縁２、四獣
奈良・大和天神山	Ⅲ期	方円・113	〃	23	内行花文４、方格規矩６、画文帯神獣４ほか	
三重・八重田８号	Ⅲ期	円・38	〃	2	捩文	捩文
福島・会津大塚山	Ⅲ期	方円・114	〃	2	三角縁	四獣
静岡・松林山	Ⅳ期	方円・110	〃	4	三角縁、内行花文、四獣	内行花文
宮崎・持田１号	Ⅳ期	方円・100	〃	2	獣帯、盤龍が離れて出土。頭位不明	
大分・灰土山	Ⅳ期	?	〃	2	四獣	珠文
奈良・新沢213号	Ⅳ期	方円・25	〃	4	斜縁二神二獣、三獣、内行花文	鳥文
神奈川・加瀬白山（北棺）	Ⅳ期	方円・87	〃	2	珠文	捩文
山口・赤妻	Ⅴ期	円?	〃	3	内行花文、双頭龍文	捩文
京都・愛宕山	Ⅴ期	方・20	〃	3	六獣、獣面	捩文
茨木・三昧塚	Ⅷ期	方円・85	〃	2	神獣	乳脚文

枚数の前に＊をつけたものは不明確なもの。鏡種は舶載・倣製の区分をしていない。

で最も重要な意味を持つ行為の一つであったと思われる。

鏡を足下と頭側に置き分ける頭足分離型配置も、古墳時代前期を中心に、地域の盟主的首長墳と推定されるような有力古墳において認められる。鏡の枚数は大阪府紫金山古墳の12枚という例はあるが、全体として身体包囲型より少ない場合が多い。被葬者の身体を囲むという意識は持ちながら、簡略された形をとったと推定される[2)]。頭足分離型の事例は、確実なものとしては滋賀県雪野山古墳などII期のものが古いが、1999年から2000年にかけて調査された奈良県ホケノ山墳墓においても、埋葬施設内の南北から鏡が出土しており[3)]、この方式が定型化前方後円墳の出現期前後までさかのぼる可能性を示唆している。

神仙思想と鏡の配置　前方後円墳の創出とほぼ時を同じくして新しい鏡配置方式が登場してくる背景は何だろうか。

副葬鏡種の特徴をみると、身体包囲型、頭足分離型の双方において、神獣鏡が含まれる傾向の強いことには意味があると考えられる。たしかに、古墳時代前期には神獣鏡が最も多い鏡種であったという事情もあろう。しかし、両配置を通じて紋様のない鏡面を被葬者の側に向けて立てかけた事例がみられることは、副葬銅鏡が単なる威信財でなく、超自然的な役割を期待されてそこに置かれたことを示唆している。その役割を考える場合、重松明久がはやくに三角縁神獣鏡配置との関連を指摘した[4)]神仙術の「四規鏡」「日月鏡」という方法が注目される（重松1969）。

東晋の葛洪がまとめた神仙術のテキストである『抱朴子』には次のような記述がみられる。「明鏡の九寸以上なるを用ひて自ら照し、思存する所有ること七日七夕なれば、則ち神仙を見るべく、或は男、或は女、或は老、或は少にてもあれ、一たび示せるの後は、心中自ら千里の外と、方に来るべき事とを知るなり。明鏡は或は一つを用ひ、或は二つを用ふ。之を日月鏡と謂ふ。或は四つを用ひて之を四規と謂ふ。四規なれば之を照らす時、

前後左右に各一を施すなり。四規を用ふるときは、見れ来る所の神甚だ多し……」(重松1969)。銅鏡を前後左右の4枚、前後の2枚、あるいは1枚を用いて自らを照らすと超自然的な力が得られるという鏡の使用法である。こうしたいわば正統な神仙術の鏡使用法がそのままの形で倭の首長層の葬送儀礼に取り込まれたとは考えにくいが、古墳出現期前後に水銀朱の棺内多量使用や北枕埋葬といった中国思想の影響が顕著になることからみて、新たな鏡配置法が同じような思想的影響を受けて登場した可能性は高い。初期大和政権によって選択された鏡が神仙世界をモチーフとした中国製神獣鏡、なかでもその霊器としての基準を満たす径9寸以上の三角縁神獣鏡であったことは[6]きわめて示唆的である。

配置方式の衰退　古墳出現とほぼ軌を一にして登場し、有力古墳の副葬鏡配置として採用された二つの方式は、前期後葉には早くも事例が少なくなっていく。そして、身体包囲型は前期末以降はみられなくなり、頭足分離型も中期にはわずかな事例が残るだけとなる。副葬配置の方式が崩れていくなかで、銅鏡副葬量は減少し、神獣鏡に対する重視も薄れていく。

こうした現象は三角縁神獣鏡の衰退、水銀朱使用量の減少、北枕埋葬原則の弛緩といった変化とも通じるものであり、全体としては葬送儀礼における中国指向の希薄化としてとらえることができよう。このことは副葬品の内容にも当然反映してくることで、たとえば被葬者の武装が中国系と考えられる小札革綴冑から朝鮮半島系とみてよい竪矧板革綴短甲、方形板革綴短甲、長方板革綴短甲、三角板革綴短甲へと転換することなどは関連する変化の代表例といえる[7]。

葬送儀礼の中で重要視された銅鏡配置や副葬品目が変化していくことは、中国思想を取り込んで成立した儀礼そのものが変質していく過程ととらえてもよかろう。その契機としては、前方後円墳の葬送儀礼創出を主導した邪馬台国政権、初期大和政権の権威を保証していた中国華北王朝が、316

年の西晋の滅亡をもって華北から消え去ったことに端を発する列島内の政治的流動化を想定するのが妥当であると考えている。

3　短剣副葬における新方式の登場

(1)　初期の鉄剣の副葬配置

鏡と並んで初期の古墳の副葬品としてほぼ必須のアイテムとなっているのは剣である。俗にいう「鏡・剣・玉」のうち、玉を欠く例が意外に多いことは[8]、神仙思想の中でとくに鏡と剣が重要な意味を持っていたことを考えると（福永光司1973）、初期の古墳葬送儀礼における神仙思想の影響がいかに強かったかを示す傍証ともなりえよう。

それはともかく、列島の首長墓においては、弥生後期後半～終末期になると鉄剣を副葬する埋葬施設が広い範囲で現れるようになる。鉄剣13本が出土した京都府大風呂南１号墓のような例外的な存在を除けば（白数ほか2000）、この時期の鉄剣副葬は１本ないし数本程度であり、被葬者個人が生前身につけていた武器が墓葬に添えられたとみるのが妥当である。同時に、それが前漢後期以降に中国で流行してくる素環頭鉄刀ではなく剣であった点には、弥生時代を通じて剣が好まれたという理由だけでは説明しきれない宗教的意味がうかがえるように思われる。

定型化古墳になると、副葬品の数量は飛躍的に増加する。副葬品について前代の首長墓との差異を整理すると、弥生終末期の墳丘墓でみられる属人性が強い副葬品目を受け継ぎながらも、被葬者の政治的な地位や権威をより明確に示すために品目ごとの多数化がはかられたという松木武彦の理解が妥当であろう（松木1999）。

鉄剣が副葬品の中に顕著に現れるようになる弥生後期後半から古墳時代前期を通じて、その副葬位置に棺内、棺外という違いはあっても、埋葬施設主軸に平行に配置するという原則が貫かれていた。これが地域をこえて

うかがわれることからみても、ある意味で規範性を持って広く行き渡っていた副葬配置であったことは疑いない9)。

(2)　新たな剣副葬配置

ところが、いくつかの古墳では、上述の配置方式の原則に反して被葬者の頭部または足部のごく近い位置に、埋葬主軸に直交させる形で剣を配置する特異な例が認められる。このようにして副葬される剣は多くの場合1本だけであり、それが被葬者にとってとくに大切な剣であったことを示唆している。被葬者の頭部、足部の近い位置に埋葬主軸と直交する方向で剣を副葬する方式を近接直交配置と呼ぶことにして、以下にその事例を簡単に紹介してみよう（表2）。なお、記述の中で剣の鋒方向を左向き、右向きという場合は、被葬者の頭を上、足を下とみた場合の左右であることを断っておく。古墳の時期は『前方後円墳集成』の編年（近藤編1992）の分期に対応させる。

①岡山県用木1号墳（図1－1，神原1975）　直径26～32mの不整円墳。中央部に長さ4.7mの割竹形木棺を直葬。推定頭部位置に尚方作獣帯鏡1枚があり、これに接して長さ18.5cm、29.4cm、29.8cmの鉄剣3本が一括して置かれていた。鋒は左向き。ほかに銅鏃、鉄刀、鉄製工具などがある。時期決定の決め手はない。円墳に割竹形木棺を直葬する方式は新しい要素とも思えるが、37本の柳葉式銅鏃に形態の崩れが認められないことを重視して、II期の築造とみておきたい。

②岡山県殿山11号墳（図1－2，平井1982）　丘陵上にある一辺13～15mの方墳。4基の埋葬施設があり、近接直交配置の剣は最も規模の大きい第4主体から検出された。第4主体は長さ3.7mの箱形木棺を直葬したもので、床面の南北2カ所に枕石があることから2人が対置埋葬されたと考えられる。剣は北の枕石の外側にあり、鋒は右向き。長さ40.5cm。棺内からはこのほかに倣製四獣鏡、鉄刀、玉類などが出土。四獣鏡は獣頭がほとん

表２　近接直交配置の剣を持つ古墳

古墳名	時期	鏡形・規模m	埋葬施設	位置・向き	短甲	鏡	銅器・腕輪
岡山・用木１号（第１主体）	Ⅱ期	円・26～32	木棺直葬	頭部・左向き		舶獣帯鏡	
岡山・殿山11号（第４主体）	Ⅱ期	方・15	木棺直葬	頭部・右向き		倣四獣鏡	
静岡・新豊院山２号	Ⅱ期	方円・34	礫槨	足部・左向き		三角縁、不明	
大阪・紫金山	Ⅲ期	方円・100	竪穴式石室	足部・左向き	竪革	三角縁10 舶方格規矩 倣勾玉文	筒形銅器 鍬形石 鍬形貝製品
滋賀・安土瓢箪山（中央）	Ⅲ期	方円・134	竪穴式石室	足部・右向き	方革	キ鳳 倣二神二獣	筒形銅器 鍬形石、車輪石、石釧
石川・雨の宮１号	Ⅲ期	方円・64	粘土槨	頭部・左向き	方革	倣神獣	車輪石 石釧
茨城・桜塚	Ⅲ期	方方・30	粘土槨	足部・左向き		倣？四獣鏡	石釧
岡山・金蔵山（中央）	Ⅳ期	方円・165	竪穴式石室	頭部・不明	形式不明	倣二神四獣	筒形銅器 鍬形石
岡山・金蔵山（南）	〃	〃	〃	足部・右向き	形式不明	舶方格Ｔ字	筒形銅器
兵庫・カチヤ	Ⅳ期	円・19	石棺直葬	足部・右向き		珠文	
大阪・東車塚	Ⅳ期	方円？・50	粘土槨	足部・右向き	三革襟	舶？四獣 倣二獣 倣四獣	筒形銅器 巴形銅器 石釧
三重・石山（東槨）	Ⅳ期	方円・120	粘土槨	頭部・右向き	長革	舶内行花文	巴形銅器
大阪・豊中大塚（第２主体）	Ⅴ期	円・56	粘土槨	頭部・左向き	長革、三革襟	倣方格規矩	
大阪・御獅子塚（第１主体）	Ⅵ期	方円・55	粘土槨	頭部・左向き	三鋲	倣五獣	
大阪・珠金塚（南槨）	Ⅵ期	方・25～27	粘土槨	頭部・左向き	三革襟	倣四獣２	
滋賀・新開１号墳（南棺）	Ⅵ期	円・36	木棺直葬	頭部左右	三革、長革	倣画像	
兵庫・亀山（第２主体）	Ⅶ期	円・40	木棺直葬	足部・右向き	横鋲		
滋賀・黒田長山４号（北棺）	Ⅷ期	円・17	木棺直葬	足部・右向き	横鋲		

金蔵山（中央）、珠金塚、亀山は不確実な事例。

ど省略されていることから最古段階とはいえないが、古墳時代倣製鏡の中では古相を示しており、築造はII期と推定される。棺外の副葬品はない。

③静岡県新豊院山２号墳（図１－３，山村・柴田1982）　墳長34mの前方後円墳。円礫に粘土を混ぜて積み上げた礫槨状の埋葬施設が後円部中央に構築され、内部には長さ約３mの組合式木棺を納置。近接直交配置の剣は長さ42cm。被葬者の足部下方にあり、鋒は左向き。剣上に重なるように２本の槍先が副葬されており、また被葬者に近接というより、棺内の小口端部に置かれているようでもあり、他の近接直交配置の事例と同じ意味でとらえてよいかは疑問も残る。頭部に舶載三角縁神獣鏡があるほか、銅鏃、鉄鏃、刀剣などを副葬。時期決定の決め手はないが、定型化した銅鏃を重視すればII期の可能性が高い。

④大阪府紫金山古墳（図２－３，小野山ほか1993）　墳長100mの前方後円墳。後円部頂に内法長さ７mの竪穴式石室を設ける。近接直交配置の剣は、北枕と推定される被葬者の足下部分にあり、鋒は左を向ける。遺物出土状況図から読みとると、長さは30cm程度かと思われる。棺内にはこのほかには方格規矩四神鏡１枚と若干の玉類がおさめられているだけであり、この剣がとくに選ばれて棺内に配置されたことがうかがわれる。棺外には三角縁神獣鏡を含む11枚が頭足分離型配置で石室両小口に置き分けられているほか、鍬形石、車輪石、竪矧板革綴短甲、筒形銅器、刀剣、農工具など豊富な副葬品が並べられている。最古型式の筒形銅器、竪矧板革綴短甲、倣製三角縁神獣鏡などの存在からIII期初頭に位置づけるのが妥当。

⑤滋賀県安土瓢箪山古墳（図１－４，梅原1938）　近江地方屈指の前方後円墳で全長は134m。後円部頂に３基の竪穴式石室が構築されている。近接直交配置の剣が存在する中央石室は内法6.6m、内部に割竹形木棺を設置する。棺内の剣は頭部と足部に１本ずつあり、このうち足部のものが鋒を右に向けた直交配置をとる。長さは出土状況図から読みとると30cm程度。

頭部のものは鋒を上方に向けた平行配置である。棺内には、このほかに頭部でキ鳳鏡と倣製二神二獣鏡、鍬形石、車輪石、石釧、玉類、腹部付近で短冊形鉄板、足下で鉄鏃が検出された程度で、副葬品は総じて少ない。対照的に、棺外には刀剣15、方形板革綴短甲、筒形銅器２、銅鏃30、鉄鏃20以上、鉄製農工具19など多くの副葬品がおさめられている。時期はⅢ期。

⑥石川県雨の宮１号墳（図１－５，安井編1998）　墳長64mの前方後方墳。後方部中央に粘土槨があり、長さ6.2mの割竹形木棺を包んでいる。頭部推定位置の周辺には倣製神獣鏡、石釧などがあり、石釧に沿わせる形で近接直交配置の剣が検出された。長さは出土状況図から復元すると45cm程度と推定される。棺内にはさらに石釧、車輪石、琴柱形石製品、刀剣、方形板革綴短甲、銅鏃、鉄鏃、鞆などが副葬されている。なお、鏡は径17cmで、画文帯環状乳神獣鏡を模倣したと思われるが、ほかに例をみないものである。方形板革綴短甲や倣製神獣鏡からみてⅢ期の築造。

⑦茨城県北条桜塚古墳（蒲原・松尾1981）　墳丘長30mほどの前方後方墳。後方部に長さ6.74mの割竹形木棺を包む粘土槨がある。剣は北枕と推定される被葬者の足下にあり、鋒を左に向ける。長さ10.3cmの小形品である。推定頭部位置には倣製かと思われる四獣鏡があり、腕の位置には碧玉製石釧が着装を思わせる状況で出土した。棺内からは玉類も着装位置で検出。メノウ製の勾玉の位置づけが問題になるが、四獣鏡や石釧がやや古相を残していることからⅢ期に考えておく。

⑧岡山金蔵山古墳（図１－６・７，西谷・鎌木1959）　墳丘長165mの大形前方後円墳。後円部墳頂部に２基の竪穴式石室を設ける。両石室から近接直交配置の可能性がうかがわれる状態で剣が出土した。

中央石室は内法長6.1mの主石室と東に付属した内法長1.6mの小石室からなっている。主石室内では頭部周辺と推定される位置に直交配置の剣が認められる。鋒方向は不明。ただし、主石室はすでに激しい撹乱を被って

残存遺物が散乱している状態であり、出土状況が当初の副葬品配置の情報をどれだけ残しているか不明なので、参考例程度にとどめるのが無難であろう。なお、この主石室からは形式不明短甲、筒形銅器、鉄鏃、刀、矛、玉類などが出土している。

南石室は内法長7.2m。両小口部は撹乱を受けていたが、被葬者の位置と推定される部分では遺物は原位置で検出された。近接直交配置の剣は足下に鋒を右に向けて置かれていた。長さ35.8cm。これと並んで、刀も直交配置で置かれている。このほかに棺内の副葬品としては頭部の方格T字鏡、刀剣、玉類、鉄製工具などがみられる。また、石室両小口部の撹乱土内からは短甲、鉄鏃、刀剣の破片が出土している。埴輪や副葬品からみて、築造時期はIV期と推定。

⑨兵庫県カチヤ古墳（図２－５，山本ほか1983）　直径19m程度の円墳。中央部に内法長1.65mの石棺を直葬する。石棺はあらかじめ天井石の裏面に側石、小口石と結合させる溝を彫り込んだ精美なものである。鉄剣は足下の小口石沿いに鋒を右に向けて配置されていた。長さ38.5cm。副葬品は棺内頭部位置から刀子、玉類、棺外から珠文鏡、玉類、針状鉄器などが検出された。滑石製臼玉を含んでおり、IV期の築造と推定した。

⑩大阪府東車塚古墳（奥野ほか2000）　墳長50m以上の前方後方墳とされているが、墳形はかなり削平されているため確定的ではない。３基の木棺が確認されたが、削平を免れて副葬品の内容がわかるのは１号棺のみである。１号棺は長さ８mの割竹形木棺を部分的に粘土を用いながら直葬したもので、鏡や刀剣類の配置からみて、一棺に２人が埋葬されていたと考えられる。近接直交配置の剣は南側被葬者の足下にあり、鋒を右側に向けて置かれている。長さは33.1cm。足下周辺には滑石製琴柱形石製品、玉類、鉄斧なども存在している。上半身の位置には鉄刀、鉄剣が被葬者の体側に沿わせるように平行に配置されている。この棺からはほかにも舶載四獣鏡、

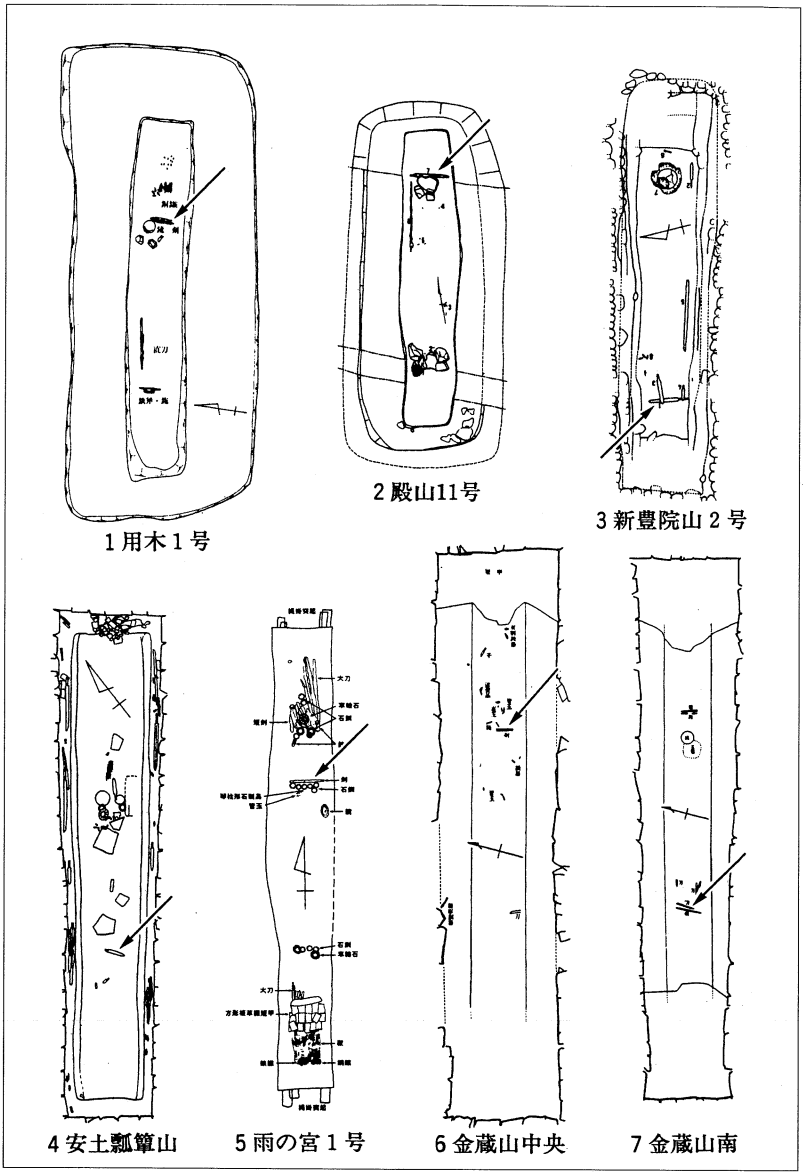

図 1　剣の近接直交配置例①
(1,4,5,6,7: 1/100　2,3: 1/80　報文より改変引用)

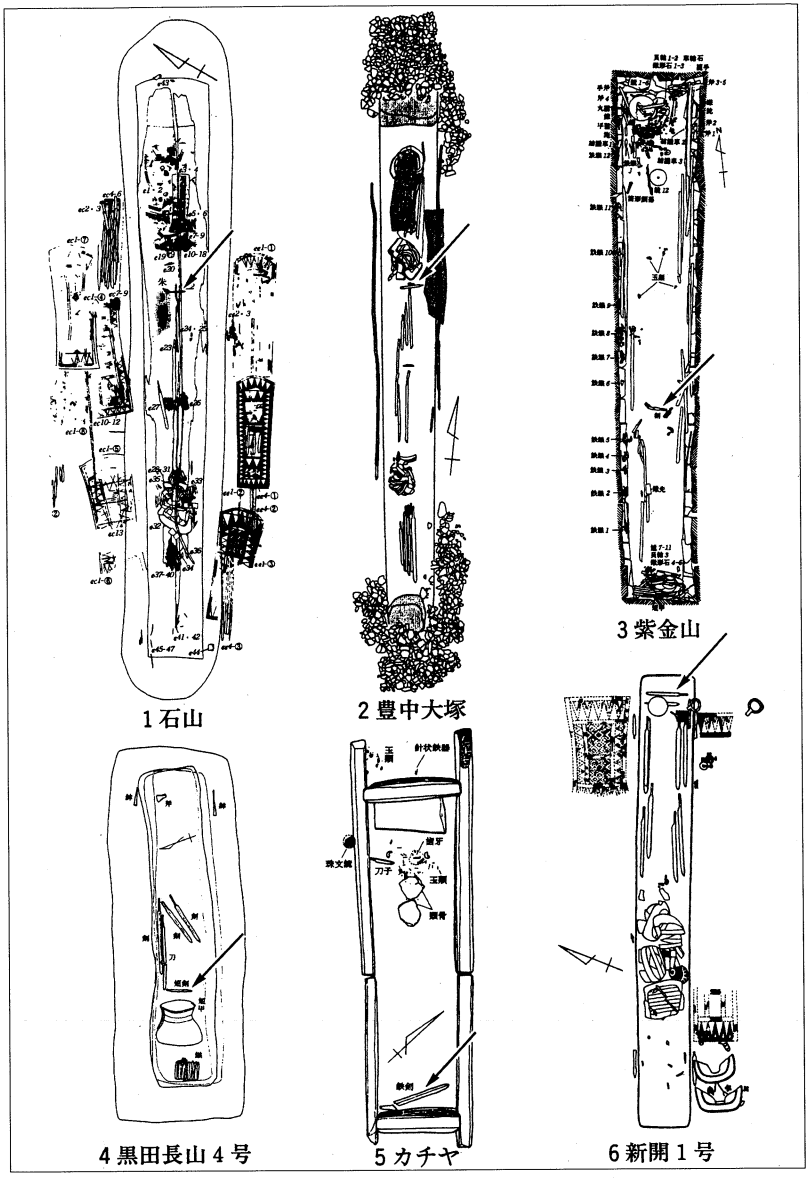

図 2　剣の近接直交配置例②
(1,2,3: 1/100　4,6: 1/80　5: 1/40　報文より改変引用)

倣製四獣鏡、倣製二獣鏡、筒形銅器、巴形銅器、三角板革綴襟付短甲、鉄製工具、石釧など多様な副葬品が出土している。

⑪三重県石山古墳（図２－１，小野山ほか1993）　墳長120mの前方後円墳である。後円部頂の同じ墓坑内に３基の粘土槨を構築している。近接直交配置の剣は、長さ7.7mの割竹形木棺を包んだ東槨で出土している。朱が集中する頭部推定位置で鋒を右に向けた状態で検出されており、出土状況図から読みとると長さ30cm未満の短剣のようである。棺内の頭側と足側には多量の副葬品が添えられている。おもなものに内行花文鏡、巴形銅器、長方板革綴短甲、鉄製・滑石製農工具、銅鏃、鉄鏃、玉類などがある。また、棺外面にも刀剣類や漆塗り盾など多数の武器武具が置かれている。

⑫豊中大塚古墳（図２－２，柳本編1987）　径56mの円墳で、墳頂部に３基の埋葬施設が確認された。このうち、割竹形木棺を包んだ粘土槨２基は一つの墓坑内に構築されたもので、報告書では東槨、西槨と呼称されている。近接直交配置の剣は、長さ７mの東槨の推定頭部位置に鋒を左に向けて副葬されていた。長さ33cm。副葬品はほかに、方格規矩獣文鏡、長方板革綴短甲、三角板革綴襟付短甲２、三角板革綴衝角付冑２、刀剣、刀子、竪櫛、革製漆塗り盾などがある。副葬品や埴輪の特徴からみて、築造時期はV期。

⑬大阪府御獅子塚古墳（豊中市1990）　上述の豊中大塚古墳に隣接して築造された墳長55mの前方後円墳。確認された２基の埋葬施設のうち、5.2mの割竹形木棺をおさめた粘土槨である第１主体部から近接直交配置の剣が検出された。推定頭部位置にある倣製六獣鏡に隣接して、長さ40cmあまりの剣が鋒を左に向けて副葬されていた。上半身位置の両側には刀と剣が１本ずつ、平行位置で副葬されている。棺内にはほかに三角板鋲留短甲、小札鋲留衝角付冑、鉄鏃、鉄製農工具、玉類、棺外には革製漆塗り盾、馬具などが副葬されている。大塚古墳の１世代あと、VI期の築造と考えられ

る。

⑭大阪府珠金塚古墳（末永編1991）　古市古墳群中にある一辺25～27mの方墳で、墳頂部に２基の粘土槨を設ける。近接直交配置の剣が検出された南槨は、長さ５mの割竹形木棺を内包しており、鏡、刀剣、玉類の出土状態からみて一棺に２人が埋葬されたと推定できる。剣は西側被葬者の頭付近に鋒を左に向けて副葬されていた。中程で折れ、把は棺主軸と平行に近い向きとなっているため、埋没過程での移動の可能性もあるので、必ずしも良好な資料とはいえない。南槨からは三角板鋲留短甲、三角板革綴短甲、小札鋲留衝角付冑、三角板鋲留衝角付冑、倣製四獣鏡、刀剣、鉄製農工具、玉類などが出土している。VI期。

⑮滋賀県新開１号墳（図２－６，西田・鈴木1961）　直径36mの円墳に２基の木棺直葬が設けられている。長さ4.9mの箱形木棺を直葬した南棺の推定頭部位置に、倣製画像鏡鏡とともに２本の剣が直交配置で副葬されている。剣の向きは右向き、左向きが１本ずつ。長さは報告書の記述と出土状況図から推定して47cmと38cm程度のものか。さらに被葬者の体側の位置には刀剣が平行配置で副葬され、足下には三角板革綴短甲、横矧板鋲留短甲など４領の短甲と眉庇付冑、衝角付冑などが置かれている。ほかにも金銅製帯金具、馬具、革製漆塗り盾など多数の遺物が出土している。

⑯兵庫県亀山古墳（梅原1939、岸本1992）　直径40mあまりの円墳。墳長に２基の埋葬施設があり、木蓋土壙墓かと推定される第２主体部において近接直交配置の剣副葬が復元されている。第２主体部は内法長3.5m、推定足下位置に横矧板鋲留短甲に重ねて右向きに２本の剣を配置している。ただ、この副葬品配置は乱掘後の聞き取りによって復元されたものであるので、情報の確実性という点では問題が残る。第２主体部からはこのほかに珠文鏡、刀剣、鉄鏃などが出土している。また、第１主体部の副葬品には、同向式神獣鏡、横矧板鋲留短甲、眉庇付冑、刀剣、槍などがみられる。

Ⅶ期の築造。

⑰滋賀県黒田長山４号墳（図２－４，田中ほか1981）　直径17mの円墳で、箱形木棺の直葬２基が南北に並んで検出された。近接直交配置の剣は、長さ3.4mの北棺の推定足下付近に鋒を右に向けて副葬されていた。長さは27.9cm。このほか北棺では足下に横矧板鋲留短甲と鉄鏃、体側部付近に刀剣、頭部付近に鉄斧、棺外に鉄矛などが副葬されていた。また、南棺にも横矧板鋲留短甲、刀、鉄鏃などが存在する。Ⅷ期の築造。

(3)　剣の近接直交配置がみられる古墳

前節では、やや不確実な情報も含めて剣の近接直交配置の事例を紹介したが、時期や地域、古墳の規模も違うこれらの被葬者間のすべてに何らかの意味のあるつながりを求めることは、常識的にみて蓋然性が乏しいだろう。ただ、被葬者に最も近い位置に、とくに短剣を選択して直交配置するというあり方は、弥生時代以来の伝統的な剣の副葬方式とは明らかに異なるだけに、葬送当事者にはこのようにすべきという、ある意味で確信的な意図があった可能性は高い。いくつかの観点から、これらの事例を検討してみよう。

時期　管見の限りでは、時期的には用木１号墳、殿山11号墳、新豊院山２号墳などが古い事例である。これらは埴輪を持たず、副葬品の組み合わせの点でも時期を確定する要素は多くないが、定型化した柳葉式銅鏃あるいは古墳倣製鏡としては古相のものを含むことから、Ⅱ期までに築造された可能性が高いと考えられる。ただ、新豊院山２号例は剣が被葬者からやや離れて木棺の小口板あたりに置かれ、上に槍先が乗っていることがやや異質であり、用木１号例は剣を３本も重ねている点が典型例とは異なっている。検討すべき点はあるが、現状では剣の近接直交配置という方式の萌芽がⅡ期にさかのぼる可能性は否定できない。

しかし、時期的な面でむしろ注目されるのは、Ⅲ～Ⅳ期に類例が増加し、

かつ有力な前方後円墳、前方後方墳にそれがみられることである。この段階の事例の多くは、紫金山古墳、雨の宮１号墳、安土瓢箪山古墳、金蔵山古墳、東車塚古墳、石山古墳などのように、棺内外に多数の副葬品が配置される中で、短剣１本だけが選ばれて被葬者の傍らに直交配置されるという典型的なあり方を示している。地域の盟主的首長墳とも呼びうる有力古墳に共通する剣の副葬配置が行われていることは、そうすべき思想的根拠も含めた葬送儀礼の新しい情報が、この時期に一部の有力首長の間で共有されていたことを示唆するものである。

Ⅴ期からⅥ期にかけては、豊中大塚古墳、御獅子塚古墳のように、典型的なあり方が明確な意図をもって採用されていると考えられる事例はあるが[10]、全体としてはこうした方式は少なくなっていく。

以上の時期的な推移をまとめると、剣の近接直交配置は萌芽はⅡ期頃にあり、古墳前期後半から中期初頭ころに有力首長の間で一時的に顕著になった新しい方式であったが、その後は十分普及することなく下火になっていったという整理ができよう[11]。

剣の向き　近接直交配置の剣は、他の武器類とは区別されて被葬者の頭部あるいは足部近くに置かれた。単なる副葬品の一つという以上の意味を有していた可能性が高い。

この剣の鋒の向きをみよう。頭部に置かれたものでは、２本が鋒方向を違えて並べられた新開１号墳例を除くと、右向きが２例に対して左向きは５例が認められる。足部のものでは逆に右向き６例、左向き３例となっている。少ない事例ではあるが、いずれかの向きが卓越する傾向がうかがえることは、これらの事例が単なる偶然の集積ではなく、その背後に共通する事情が存在していた可能性を示唆している。しかし、頭部と足部の違いや向きの違い、さらには近接直交配置そのものが持っていた意味内容を十分に理解することはできない。現状でいえるのは、特異な剣配置の共通性

が地域、時期をこえて認められるということだけである。

副葬品との関連　他の副葬品との関連ではいくつかの興味深い点が指摘できる。まず、II期にさかのぼる可能性の高い3例を除いては、ほとんどが短甲を共伴していることが注目される。短甲を所持することに一定の階層的優位性を認めるなら、この剣配置は相対的上位の階層において広がった情報に基づくものと推定できよう。なかでも、近接直交配置が顕著になるIII期からIV期の事例においては、竪矧板革綴短甲、方形板革綴短甲、長方板革綴短甲、三角板革綴短甲といった最新式の短甲を保有する有力古墳が目立つ。

また、紫金山古墳、安土瓢箪山古墳、金蔵山古墳の筒形銅器、石山古墳の巴形銅器などは、近年朝鮮半島南部地域の首長墓からも副葬例がみられるようになってきたいわゆる倭系遺物である。上述の短甲も技術的にはこの地域とのつながりがうかがえることを考えあわせると、この時期に近接直交配置を採用した有力古墳が、朝鮮半島南部勢力との交渉を足がかりにして台頭した新たな政治勢力の主要な一員であった可能性が高い[12)]。

さらに、紫金山古墳を除けば、この時期に副葬が依然として続いていた三角縁神獣鏡を持つものがみられず、逆に三角縁神獣鏡以外の倣製神獣鏡が安土瓢箪山古墳、雨の宮1号墳、金蔵山古墳などで副葬されている。筆者は別稿において古墳時代前期の倣製神獣鏡を検討し、これらの非三角縁の倣製神獣鏡が、三角縁神獣鏡を配布した大和盆地東南部勢力とは異なる新興勢力によって製作、配布されたものという理解を示している（福永1999c）。剣の近接直交配置という現象について最も重要なことは、中期に続くこうした新しい要素をいちはやく手にしたIII～IV期の特徴的な古墳が、その中に含まれているという点なのである[13)]。

4　結語―配置方式の変化の意味

前章までに、前期古墳の主要な副葬品である鏡と剣の特徴的な副葬配置を概観した。いずれも弥生後期後半以降、広く列島規模の首長層の墳墓に副葬されるようになるが、その副葬配置方式の変化という点では、両者は違った道すじをたどる。

すなわち、鏡副葬に関しては、副葬量が急増する前方後円墳成立期に神仙思想の影響を受けたと考えられる身体包囲型、頭足分離型配置が現れ、三角縁神獣鏡を複数副葬する有力古墳に採用されるが、三角縁神獣鏡の衰退と歩調をあわせるように前期末には事例が減少していく。これに対して剣は、弥生後期後半以来、前方後円墳成立期をこえて一貫して埋葬主軸と平行に配置する方式が一般的であったが、古墳時代II期を萌芽としてIII期～IV期にかけて近接直交配置という新しい方式が現れるようになる。しかも、その古墳は中期につながる新しい要素を持つ新興の有力古墳であり、かつ、地域の首長系譜の連続性を断ち切る形で出現する傾向にあることは注目される（福永1999ａ）。

鏡と剣では副葬方式の変化内容は一致しない。しかし、双方の変化が前期後半から前期末というほぼ同じ時期に進行することは偶然とはいえない問題を含んでいるように思われる。

古墳時代においては、中央政権は最も入念な葬送儀礼の方式を考案し、各地の首長はこれとできる限り共通の方式を採用することで、政治的立場を鮮明に主張することが可能になったと考えられる。階層的に上位の首長になればなるほど、地理的距離をこえていわゆる中央的な葬送儀礼が行われたことは、各地の大規模古墳の状況を観察すれば理解しやすい。地域の盟主的首長墳ともいえる有力古墳に認められる儀礼上の共通性は、その首長層が参画した政治的枠組みの中心勢力によって作り出された形であった

ことを示唆している。つまり葬送儀礼は、中央と周辺の関係を形成、維持するための戦略としてコントロールされたのである。

このように考えるなら、葬送儀礼の変化の背景に、それを管理し正統化していた中央政権の変動を読みとることも可能になる。古墳時代前期後半から前期末にかけては、初期の巨大前方後円（方）墳が築造された大和盆地東南部における古墳造営が下火になり、これと交替するように、盆地北部の佐紀盾列古墳群や河内の古市古墳群に巨大古墳が造営されるようになる。筆者はこうした古墳分布の変化の背後に、中央政権内における政治的主導権の交替を読みとる立場を支持しているが（都出1988、白石1989)、本稿で検討した鏡、剣の副葬配置方式の変化は、そうした勢力交替に伴う儀礼内容の変質であったと位置づけることができよう。

副葬品目のごく一部にみられる配置方式のわずかな変化をそこまで有意に解釈していいのかという疑念もたしかにありえよう。しかし、本稿でみてきたように、この変化は筒形銅器、巴形銅器の登場、三角縁神獣鏡の衰退と新式神獣鏡の製作、朝鮮半島系の武装への転換、首長墳系譜の変動といったいくつもの要素にわたる変化と連動した動きであった可能性が高いのである。逆に、葬送儀礼の諸要素がこのような政治的変動を敏感に反映する点にこそ、首長の葬送儀礼の管理が大きな政治戦略ともなったこの時代の特質があらわれているといえるのではなかろうか。

5　おわりに

古墳には、そこで執り行われた複雑な葬送儀礼の情報が残されている。本稿では、そのうち鏡と剣の副葬配置の変化に着目し、それが前期後半から前期末にかけての列島規模での政治的変動を反映している可能性を指摘した。ただ、神仙思想の影響を受けた鏡の配置方式が、中国王朝との交渉が断たれる中で衰退していくという理解はともかくとして、前期後半に顕

著になる剣の近接直交配置については、その思想的背景をなお明確に説明できないでいる[14]。また、前期後半から前期末の段階で一時的に顕著になった近接直交配置がその後継続的には普及せず、やがて中期になると例を減らしていく原因も考えてみる必要がある。解決すべき課題は残されたが、考古資料における変化の断片を集めて一つの歴史像に復元する作業の一歩として本稿を位置づけておきたい。

執筆にあたって、佐々木憲一、白井美友紀、清家章の各氏から有益な教示と援助をいただいたことに感謝する。

註

1) 弥生中期の福岡県立岩遺跡10号甕棺墓では、6枚の前漢鏡が推定被葬者位置の両側に3面ずつ並べられ、身体包囲型的な配置をとるが、弥生時代においてはこの一例のみであり、年代的にも古墳の事例とは200年以上の開きがある。両者の間につながりを考えるのは困難である。
2) 藤田和尊は、近畿地方において頭足分離型配置と頭部集中型配置が分布域を異にするととらえて、その原因をそれぞれの配置方式をとる鏡の配布元の勢力が異なっていたことに求めた（藤田1993）。鏡配置の違いから大きな問題を読みとろうとする意欲作であるが、両方式の分布域が異なるという理解には疑問がある（福永1995）。
3) 現地で調査担当者からご教示をいただいた。
4) ただ、良好な発掘事例が不十分だったこともあり、重松は大分県赤塚古墳におけるやや不確実な出土状況を四規鏡との関連で例示しただけである（重松1969、268頁）。
5) 弥生後期前半に北部九州や北近畿で一時的に素環頭鉄刀がみられるが、後期後半から終末期にはふたたび剣が主流となる。古墳時代前期には、長大な素環頭大刀が現れるが、数量的には依然として剣が卓越する。
6) 『抱朴子』には神仙術で用いる鏡が9寸以上であることが記されている。
7) 奈良県黒塚古墳、兵庫県西求女塚古墳、滋賀県雪野山古墳などのように前期前半の有力前方後円（方）墳から小札革綴冑が出土する事例が

急増している。橋本達也は小札革綴冑には原則として鉄製甲が伴わず、方形板革綴短甲などには逆に小札革綴冑が伴いにくい傾向を重視し、両者の武装内容が中国系、朝鮮半島系という別系譜にたどれることを示唆している（橋本1998）。また、竪矧板革綴短甲から長方板革綴短甲への型式的連続性については高橋克壽らが指摘している（高橋1993）。

8) 京都府椿井大塚山古墳、奈良県黒塚古墳、大和天神山古墳、兵庫県西求女塚古墳、滋賀県雪野山古墳、岡山県湯迫車塚古墳、福岡県一貴山銚子塚古墳など、鏡や剣を多量に持つ古墳において、玉がみられない事例は多い。玉が葬送儀礼において必須の品目でなかったことを示唆している。

9) 筆者の視点とはまた違うが、刀剣類の鋒の方向から副葬配置の地域性を探ろうとする研究が宇垣匡雅によって進められている（宇垣1997）。

10) 豊中大塚古墳、御獅子塚古墳は大阪府北部の桜塚古墳群内に築造された連続する2世代の首長墳で、両者にきわめて類似した近接直交配置がみられた。筆者が近接直交配置が偶然の所産ではなくたしかに意図的なものであると考え始めた契機の一つは、この2古墳の調査に参加したことにある。

11) II期以前の3例とIII期以降の事例の間に系譜的なつながりがあるがどうかは明確でない。古墳の規模や地域という点をみれば、「他人のそら似」である可能性も十分にありえよう。これに対してIII期以降の事例の多くには、甲冑を持つことや有力な古墳が含まれることからみても、近接直交配置という情報が共有または継承された可能性が高い。

12) 筆者は、中国華北王朝との交渉を通じて政治的主導権を確立した前期前半の大和盆地東南部勢力から、朝鮮半島南部勢力との交渉を基盤として台頭した大和盆地北部および河内平野勢力への覇権の移動を考えている。その背景には前者の権威を保証していた華北西晋王朝が316年に滅亡したという東アジアの歴史状況が考えられる。

13) 紫金山古墳は、竪矧板革綴短甲、筒形銅器など新しい要素がみられる一方で、三角縁神獣鏡を頭足分離型配置で多数副葬し、古式の鍬形石を有するなど伝統的な内容も残している。中央政権内の旧勢力と新興勢力の双方からの働きかけを受けた被葬者像を想定している。

14) この時期には、朝鮮半島南部勢力との交渉が活発になっていくが、現状では彼の地に近接直交配置の系譜を求めうる状況にはない。朝鮮半島南部の三国時代の墳墓では、素環頭大刀を埋葬主軸に直交させて置

く例が福泉洞39号墳、64号墳などでわずかにみられるが、通例とはいえない。また、短剣でない点も本稿で取り上げた列島の事例とは異質である。なお、韓国の事例については李1994を参考にした。

参考文献

今尾文昭1984「古墳祭祀の画一性と非画一性」『橿原考古学研究所論集』第6　吉川弘文館
梅原末治1938「安土瓢箪山古墳」『滋賀県史蹟調査報告』第7冊　滋賀県
梅原末治1939「在田村亀山古墳と其の遺物」『兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告』第14輯
宇垣匡雅1997「前期古墳における刀剣副葬の地域性」『考古学研究』第44巻第1号
奥野和夫ほか2000『交野東車塚古墳（調査編）』交野市教育委員会
小野山節ほか1993『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館
橿原考古学研究所編1999『黒塚古墳調査概報』学生社
神原英朗編1975『用木古墳群』山陽団地埋蔵文化財調査事務所
蒲原宏行・松尾昌彦1981「桜塚古墳」『筑波古代地域史の研究』筑波大学
岸本直文1992「亀山古墳」『兵庫県史』考古資料編
近藤義郎編1992『前方後円墳集成　近畿編』山川出版社
重松明久1969『邪馬台国の研究』白陵社
白石太一郎1989「巨大古墳の造営」『古代を考える　古墳』吉川弘文館
白数真也ほか2000『大風呂南墳墓群』岩滝町教育委員会
末永雅雄編1991『盾塚鞍塚珠金塚古墳』由良大和古代文化研究協会
高橋克壽1993「4世紀における短甲の変化」『紫金山古墳と石山古墳』京都大学部博物館
田中勝広ほか1981『北陸自動車道関係発掘調査報告書VI』滋賀県教育委員会
都出比呂志1988「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』22　大阪大学文学部
寺沢知子1979「鉄製農工具副葬の意義」『橿原考古学研究所論集』第4　吉川弘文館
豊中市教育委員会1990『御獅子塚古墳』
西田弘・鈴木博司「栗東町安養寺古墳群発掘調査報告」『滋賀県史跡調査報告』第12冊　滋賀県教育委員会
西谷真治・鎌木義昌1959『金蔵山古墳』倉敷考古館

橋本達也1998「竪矧板・方形板革綴短甲の技術と系譜」『青丘学術論集』第12集　韓国文化研究振興財団
平井勝1982『殿山遺跡・殿山古墳群』岡山県教育委員会
福永伸哉1995「三角縁神獣鏡の副葬配置とその意義」『日本古代の葬制と社会関係の基礎的研究』大阪大学文学部
福永伸哉1999ａ「古墳の出現と中央政権の儀礼管理」『考古学研究』第46巻第２号
福永伸哉1999ｂ「古墳時代の首長系譜変動と墳墓要素の変化」『古墳時代首長系譜変動パターンの比較研究』大阪大学文学部
福永伸哉1999ｃ「古墳時代前期における神獣鏡製作の管理」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室
福永光司1973「銅鏡における鏡と剣―その思想と源流―」『東方学報』第45冊
藤田和尊1993「鏡の副葬配置からみた前期古墳」『考古学研究』第39巻第４号
松木武彦1999「副葬品からみた古墳の成立過程」『国家形成期の考古学』大阪大学文学部
安井重幸編1998『史跡雨の宮古墳群整備報告書』鹿西町教育委員会
柳本照男1987『摂津豊中大塚古墳』豊中市教育委員会
山村宏・柴田稔1982『新豊院山墳墓群』磐田市教育委員会
山本三郎ほか1983『半坂峠古墳群・辻遺跡』兵庫県教育委員会
用田政晴1980「前期古墳の副葬品配置」『考古学研究』第27巻第３号
李柱憲1994『三国時代嶺南地方大刀副葬相에대한研究』慶北大学校文学碩士学位論文

（文学研究科助教授）